



洋書輸入協会会報

Vol. 28 No. 7 (通巻326号) 1994年7月

ABA 書籍展見聞録

5月28日(土)から31日(火)の4日間、初夏の Los Angeles の Convention Center で ABA の主催する展示会が開催され、日本からも洋書輸入業者、書店、出版社等の方々が多数参加されました。

今回の会場は3ヶ所(West, South, North)の建物に区分けされていて、合計32万 sq.ft. と、昨年に比較して22% (6万 sq.ft.) 広くなりました。出展社は約1,800社で、総入場登録者は38,131人と後日発表されています。この展示会は3日間(30日は Memorial Holiday で休日)の連休をはさんでおり、一般の入場者は少なかったが昨年に比較すると総合計では大幅に増加しています。会場全体のムードは、アメリカで開催されていると言うことを実感させてくれる大変華やかな(?)もので、各ホールの中央付近に設けられた Multimedia 関連出版社の一般読者向けの商品が大変好評を博しており、日本との市場性の違い、種類の多様性を痛感しました。また私が出席した出版社のセミナーでは Multimedia のソフトウェア ビジネスは、機器本体の価格低下が普

及の導火線となり、成功への鍵も握っていると強調していました。

ABA の特徴なのか、STM の学術出版社が少なく、たまたま日本では学術出版社としてよく知られている出版社でも、展示書籍はほとんど一般書で学術書のカタログはアンダーデスクで管理し、こちらが要求をしなければ出してくれないことがありました。弊社の取り扱い分野のコンピュータ関連書籍では、日本でも今話題のネットワーク、インターネットに関する書籍が日本では知られていない小さな出版社を含め、多くの出版社のコーナーで見受けられました。

余談ですが、今回の会場ホール内は全て禁煙で、さすが嫌煙権の先進国、アメリカの面目躍如と強く印象に残りました。

次回、1995年の ABA は Chicago の McCormick Place で、6月3日(土)から6日(火)までの開催を決定しております。

(株)トッパン 酒井昭奉記

ABA 書籍展見聞録	1	文化厚生委員会だより	3	東京の坂と橋と文明開化 77	7
うちの会社	2	お奨めしたい本	4	広告	8
海外ニュース	2	洋書輸入協会史 88	5		

光洋書(株)

戦後の荒廃も漸く復興し、人々が一生懸命仕事に励むようになると、自然にエネルギーの需要がふえる。しかし、我が国のエネルギー資源は全く乏しい。国を挙げて海外の石油資源漁りが丁度始まった頃、吾社は誕生した。

エネルギー全般に渡る洋書の輸入は、特殊分野のため得意先のお知恵を拝借しなくては、とても追いつくものではありません。吐られ吐られてやっと納品。それで、たいした金額にならない文献資料が多く、労、多くして実り少ない仕事でしたが、苦勞して入れた品物を納める時、得意先の喜ぶ顔を見せられると、無性に嬉しく思いながら25年が過ぎました。

吾社は、社長始め、社員一同が、どうも金儲けと言うより、得意先の喜ぶ顔を見る楽しみで仕事をしている感有り。これは、こうした難しい品物を入れる縁の

下の力持ち的な業務が好きでないととても続くものでは有りません。

それでも、なんとかそこそこの経営を続けて今日まで参りましたが、最近思うに、洋書は以前は必需品でしたが、今日では何か、嗜好品に類する扱いを受けている様な気がするの、私共だけの僻み根性でしょうか。

20年の遅れを取り戻す為、夜を日に次いで読み漁った顧客は、どこへ行ってしまったのでしょうか。

ハードからソフトへ、時代が代わって私共の様な輸入業者は、得意先のインクの香りを眼を細めて楽しむ顔は、もう見られないのでしょうか。

でも、私達は、洋書を必需品と見做してくれる数少ない顧客の為に、これからも縁の下の力持ちを続けて行きたいと思って居ります。どうぞよろしく。

海外ニュース

1994年ブダペスト・ブックフェアの 回顧と将来の展望

本年4月下旬にハンガリーの首都ブダペストで開催された第1回国際ブックフェアを訪れた人々は、これまでこの街で開かれた幾つかのブックフェアと比べて、その発展ぶりに驚いたという。

今回のフェアはフランクフルト・ブックフェア、ハンガリー出版協会、Booksellers Association 三者の共催で、2000平米の敷地に20ヶ国365社が出展、うち80社がハンガリーの出版社だった。展示スペースは大講堂を丸く囲んだ3階から成り、ブースを出した海外出版社には静かに商談のできるスペースが多かった点などが好評だった。英国からは Longman, Harper Collins, CUP などの BLT 関係の出展が目立った。

ブックフェア参加者の中には、世界各国でのフェアのスケジュールが過密となってきたことから、ブダペスト、プラハ、ワルシャワの三都市のブックフェアを統一し、3年ごとのローテーションで順次開催しては、という意見がある。しかし、ハンガリー出版・書店協会の会長 Bart 氏のように、三都市の個性を生かしたそれぞれ特徴あるフェアの開催の方が好ましいと見る人々もいる。いずれにしても、旧共産圏の国々で今後ブックフェアはますます盛んになると予想されるが、海外出版社にとってそれら全てに参加することは到底不可能だろう。

初めてのブダペスト国際ブックフェアは、ほとんどの参加者が満足し、成功裏に終わったといえるが、一部の専門出版社からはこのフェアのハンガリー側の参加者に大学や研究所のライブラリアンや専門家がいない点に不満の声もある。

今回のフェア全体の予算は日本円にして約3000万円であった。

—The Bookscller 5月13日号より—

フォーティ・ラブ（テニス同好会）報告（5月）

1994. 6. 22

風薫る5月箱根で「温泉とテニス」の合宿が（27日夕刻集合、28日一日で）行われた。聞いただけでも誰もが羨望を覚えるのではないと思うが、幹事各位の「日頃のストレスを解消しなさい」と言う思い遣りの楽しい週末“Gathering”である。

箱根湯本までの小田急ロマンスカー、寛ぎながら仕事を離れた語らい、そして温泉と夕食、定例の二次会がテニス・メイトを爽やかな、しかも切れない糸で結び付ける。

前日からの低気圧の接近が、夜半から明け方にかけてかなりの雨量を降らせるかも知れないとの予報に、参加者一同翌日の天気が気になったが、コートも予定の28日午前9時～午後1時に加え、3時～5時の2時間を確保した。幹事の方々の機敏な行動力と、常日頃のご配慮に対し、この機会に会員を代表して深く感謝の意を表したい。

当日、箱根明神平サニーパークのオムニ・コートに到着したころにもれ始めた薄日が絶好のテニス日和を醸しだした。この一日で総勢17名が充分健康と親睦を勝ち得たと信ずる。オズボーン社長ご夫妻（ロングマン）がレギュラー・メンバーになられた事、また7年余のニュー

ヨーク駐在を無事勤め上げて帰国された関口ご夫妻（丸善）の参加等、我々のクラブもJBIAクラブとして相応しい国際的な存在に発展してきた事のご同慶の至りである。サニーパークから眺める大湧谷の噴煙は自然との触れ合いを感じさせる。鶯の「谷渡り」が爽やかに響する。何時までもこの自然に包まれてテニスを続けたいと真剣に考えた。

これからも更に多くのテニス愛好者が参加される事を期待して！！
（RA記）



囲碁同好会報告

「あじさい祭り」たけなわの箱根湯本、ますとみ旅館、において平成6年度の囲碁大会が7月9・10日（土・日）に開催されました。プロの石毛先生も指導に参加してくださいまして、当大会は11年通りの和気あいあい（本当はもっと闘士を燃やすべきなのでしょうが）のうちに過ぎ、大変楽しい2日間であった事をご報告します。

大会は現地に到着後、温泉で汗を流し、スイス方式により、参加した12名がそれぞれ4回対局しました。大会終了後も午前3時頃まで全員が打ち続け、全く年を感じさせない気力の程に普段から体力に自信を持つ筆者もた

じたじとなっていました。それにしても参加者数が減少、平均年齢が上昇と言う傾向にあり、何となく侘しい集まりが続いている昨今で、ぜひ若い女性棋士の参加を促したいと言うのが皆の偽らざる気持ちでした。

棋力に合わせての大局ですが、本年は「横一」から「横七」までの弱者救済の全くない設定で、級レベルは全員初段、最上級者は七段。中国では棋力が違っても決して置かないで打つ、即ち互先で打つのだそうで、今回は良い勉強になったかも知れません。因みに優勝は洋販の長島七段と言う結果でした。
（RA記）

野口悠紀雄著

「超」整理法

情報検索と発想の新システム

中公新書 (1159) 1993年刊 232頁 720頁

あなたの机の上には、これから整理しなければ、と考えている書類などが積んでありはしないか。あるいは、キャビネットのひとつが「要整理分」などという表示をつけて、そのくせ、いつになっても整理されることなく放置されてはいないだろうか。そんなあなたに、一読を勧めたいのがこの一冊である。

従来、誰もが疑うことのなかった「資料の整理はまづそれを分類すること」という考えを、否定するところから本書は始まる。そのかわりに提示されるのは、「時間軸による検索」という全く新しい発想である。

ミステリー小説の種あかしをするように、この発想の実行法を言ってしまうと、すべての情報資料を一定規格の封筒に入れ、本棚にたてていれる。時間にしたがって左から順につっこんでゆくが、検索のために取り出した資料はまたもとの位置に戻すのではなく、左はじ、つまり、最も新しい資料が占める場所に置かれる。この作業をくりかえすことによって、棚の左側には最新の資料と、複数回とりだした資料が置かれ、使われることのない資料は右に押しやられてゆく。筆者はこれを「押出し式」と呼ぶが、本書にはこのほかに「神様ファイル」とか「家なき子ファイル」、あるいは「君の名はシンドローム」といったユニークな命名が各所になされている。

以上は『紙と戦う「超」整理法』と名づけられた第一章の紹介であるが、第二章は『パソコン・による

「超」整理法』で、さらに第三章では『整理法の一般理論』が述べられている。

筆者はこの「超整理法」による「押出しファイリング」を個人用と断っている。だが、はたしてそうであろうか。カタログの山と格闘するわれわれ洋書店にとって、この方式はいちど試してみる価値がありそうである。たとえば、出版社名によりアルファベティカルに整理する約束の、カタログ用キャビネットの場合、いちど使ったものは元に戻さず前に置く、新しいものも、おおざっぱな分類（例えばA～E）にとどめ、どんだん前にいれてしまう。そうすると恐らく一年後には、分類収納されただけで、いちども取り出されることのなかったカタログがいかに多いかが分かることだろう。

「時間軸による検索」が適当なもののなかに名刺がある。つまり保存する名刺は、氏名や所属先による分類を一切せず、受け取った時間にしたがって保存し、あるていど溜まったらコピー取りをしてファイルする。「分類するな、ひたすら並べよ」の大原則がここでも適用されるのである。

情報洪水のなかで生活する我々にとって、知的活動の生産性を高める新しい方法論がここで提案されているわけで、この方面に関心のあるものにとって興味深い本といえよう。

（鈴木／MEC）

JBIA DIRECTORY 1994

（洋書輸入協会ダイレクトリー1994年版）

25.7×18.2cm 350頁 会員価格 2,500円（送料共）
一般価格 4,500円（ " ）
海外価格 8,000円（ " ）

洋書輸入協会史 (88)

洋書輸入協会顧問 相 良 廣 明

102 ふたたび返品とクレジットの問題（前号よりの続き）

102.2 昭和37（1962）年度の「返品とクレジットの問題」の推移（前号よりの続き）

102.2.3 再び通産省との懇談

昭和38（1963）年に入っても「返品とクレジットの問題」はくすぶる続け、理事会としても対策に苦心している。同年2月25日の理事会では、

- (1) 現行の水面下に潜っているこの問題を、いかに軌道に乗せるかが、通産・大蔵及び業界の共通の課題である。
- (2) 大きな問題点の一つは、取り換え分の通関は認められるが、その取り換えが返品した本と同じものでなければならないということにある。これを何とか「書籍」を「書籍」で取り換えるというように改正出来ないものか。
- (3) 「書籍を書籍で取り換える」を現行規定で行うためには、輸入のライセンスにインボイスをつけて提出し、更にクレジット・メモを添付して許可を受けなければならない。この規定通りに一件一件を処理するのは大変な手間である。この管理が撤廃できないか。
- (4) 管理の撤廃ができるまでは、何とか現行の「もぐり」の黙認状態を継続して貰いたい。
- (5) 或いは、「書籍を以て書籍と取り換える」権限を税関に与えて貰うことは出来ないか。

などと、今までとさして代り映えのしない議論を繰り返したあと、3月8日に業界の懇談会を開いて、いかにこの問題が厄介な、処理の困難な問題かということを会員に説明し、協力の諒承を得た。そこへ通産省からの話があって、理事会と同省関係部署との懇談会を、3月13日に開催している。出席者は、通産省の輸出課及び輸入課から6名、大蔵省の関税局から1名と協会の理事一同である。

席上、まず通産省通商局輸出振興課の係官から、一年前に洋書輸入の業界が「返本とクレジットの問題」について処理に労苦している話を輸入課の方から聞き、検討することとしていた。そこへたまたま丸善と紀伊国屋の

双方に返品問題が生じている。これはいずれも量的には微々たるものであるが、本質的に法の趣旨と合わないものがある。従って協会と良く話し合ってみたいと思い集まって貰ったとの説明があった。

次に丸善田辺氏より、「返品とクレジットの問題」につき出版物の抱える特殊性と、現行規定の間に生ずる矛盾とを縷々と説明。その上で討論に入ったが、席上通産省側からは次のような発言があった。

- (1) AA制度は、金と物とが密着している制度であるから、これに乗せて物が輸入されたとき返品問題が起きれば、処理の困難な問題となる。
- (2) 従って貸借勘定が起きることを前提に夫々あらかじめクレジットの許可申請を出しておき、その後は無為替輸入、輸出で処理されるべきであろう。
- (3) こうして、輸出面では現行規定に合せて処理することができるが、それは実効の伴わない手続きの繁雑さが残るだけであるから、輸入面の側から改正する必要がある。
- (4) 「返品とクレジットの問題」は、出版物の特殊性に伴う根の深いものであるから、自由化も近いことであるし、当面は無為替輸出の線に沿って、税関には目をつぶって処理して貰う以外にないだろう。しかしなおよく課内で検討してみよう。

その後も種々双方から意見が出たが、結局のところ、当分黙認、なお検討を続けるという線に落ち着き散会している。

この線は、理事会側で最も希望する線であったが、なお次のような点を洋書輸入協会としてよく飲み込んでおかなければならないということで意見が一致した。即ち

- (1) 現行黙認という形は、関係官庁の係が変わる度毎につつかれて厄介なこととなるが、かといって規定通りにしようとする、必ず現行に数倍する厄介な手続きを取らざるを得ないので、完全自由化までは黙認、問題が起ればその都度説明という方法が最良である。
- (2) 関係官庁の係が変わって、また問題化しても、良く説明すれば、今日のように必ず分って貰えるのであるから、説明する労を惜しまないようにしよう。
- (3) いずれにせよ、現行制度の下では簡単な方法は無い

ということを承知の上で、「返本とクレジットの問題」を処理しなければ、官庁側の第三者に取り上げられると「黙認」は面倒なこととなり兼ねないから、留意を要する。

(4) 今後とも、通産・大蔵・税関の関係部署とは懇談を続け、「黙認」を続行するという「黙認」を取り付け続ける必要がろう。

102.3 決済後3カ月以内に返品する場合に限り、輸入申告のみで、輸出のライセンスは不要となる。

昭和38(1963)年度に入っても、「返品とクレジットの問題」の状況は変わらず、時々東京税関と懇談の機会を作っては意志の疎通を計っていた。それが年末に至ってすこしばかり状況が変る。即ち、昭和38('63)年12月25日付、JBIA No. 176-Bで、会員に次のように知らせている。

記

委託販売の輸入について

御通知が遅くなりましたが、去る11月26日の通産省公報に、委託販売による輸入の返品手続きについて、注意事項が発表されました。

それによりますと、従来返品の際に無為替輸出承認証を申請取得しておりましたが、今後は決済後3カ月以内に返品する場合に限り輸入申告のみで、輸出のライセンスは不要となりました。

また返品する際には、再輸出(返品)する金額、数量を輸入認証面に裏書を受けることになりました。(以上)

この注意事項については、翌昭和39('64)年1月14日の理事会で検討された結果、3カ月の間だけでも輸出のライセンスが不要になったということは、若干の簡素化が計られたと評価している。

こうして、「返品とクレジットの問題」は、昭和38('63)年度中には、若干の改善を見たにとどまり、その他は現状のままで昭和39('64)年度以降に繰り越されていくこととなった。

103 ドイツ書籍展示会

昭和37(1962)年11月7日、洋書輸入協会懇談会に、ドイツ書籍出版協会の代表として Dr. Müller-Römhald が出席、明年秋に計画しているドイツ書籍展示会について次のような説明があった。

(1) 規模は昭和32(1957)年に国会図書館、札幌・仙台・大阪・京都で開催したものと同程度のものとし、約3,000点を展示する。

(2) カタログは15,000部程を配布する予定。

(3) 日本はドイツから年間約500万マルクの出版物を輸入しており、大部分は学術書で、ドイツとしては日本の市場を重要視している。

次は昭和38(1963)年5月28日に開催された協会総会の席上で、メクレンブルグ商会の鈴木和夫氏から、ベルゼンブラット誌の記事の紹介があった。それによると展示会は9月13日から札幌で始まり、全国で6カ所開催する。この展示会は非商業的なものであり、ポスターとチラシは約5万枚を作る。展示会後約3,000点の展示書籍は日本の文化団体に寄贈される予定とのことである。

しかし協会とドイツ書籍出版協会との連絡はなく、当展示会が非商業的なものであるためか、展示会は各地の予定展示場と直接交渉で準備が進められ、協会としては動く余地が無い様子であった。8月には最終的な日程と場所の通知があっているが、相変わらず何の協力要請もないままに過ぎている。

9月11日になって、漸くドイツの大使館文化部長の Dr. Curt Frieze と理事会の打ち合わせが実現した。しかし聞いてみると、前年に協会と接触した Dr. Müller-Römhald は Börsenverein を退職し、後任の人はどうも洋書輸入協会との接触なしで事を進めている模様であり、ドイツ大使館も詳しくは知らされていないように見受けられた。協会としても先方からの正式な協力依頼が無い以上、動く訳にもいかず、当分静観ということとした。

結局ドイツ書籍展は、次のような形で多少の変更はありながらも無事終了している。

主催：ドイツ書籍出版協会

後援：在日ドイツ連邦共和国大使館

日独協会

展示図書：340の出版社から厳選された2800部以上

展示会場：札幌、9月、北大クラーク会館

名古屋、10月、愛知県文化会館

東京、10月、東京文化会館

仙台、11月、東北大学農学部

大阪、11月、十合百貨店

京都、12月、京大図書館

なお東京文化会館における展示会開会式は、10月20日に、ドイツ大使館 Dr. Herbert Dittmann とドイツ書籍出版協会会長 Herrn Friedrich Wittig 同席のもとに開催されている。

(続く)

本郷界隈の坂〔18〕

順天堂病院と近代の医学

丸善・本の図書館 鈴木 陽 二

◆ドイツ医学の導入と内科医ベルツ

幕末・明治の西洋医学導入のいきさつは、まるで藩閥間のきしみを象徴するかのようであった。大村益次郎が京都で刺客に襲われて負傷したとき右大腿部切断の手術を行ったのはボードインで、これが機縁となって木戸孝允を始め長州藩はオランダ医学のシンパとなった。薩摩藩は薩英戦争が幸いに転じイギリスと親密な関係にあったので、英国医学の導入に積極的であった。

ウィリス (William Willis) という医師がイギリス公使館付きとして赴任したのは、1861 (文久元) 年であった。鳥羽・伏見の戦いが勃発するや彼は官軍の要請で戦地へ赴き、さらに北越・東北の戦闘にも従軍して傷病兵の治療に当たった。この戦役で西郷従道も彼の治療で一命を取り留めたという。戦局が拡大し、増加する傷病兵の対策に、東征大総督は軍陣病院を横浜に開設するが、間もなく東京に移し旧幕府の医学所を吸収して「大病院」と改組した (後年東京大学医学部付属病院になる)。明治新政府の信任が厚かったウィリスは、動乱終結にともなってこの大病院の院長に迎えられ、また大学東校で外科の教鞭をとり医学教育にも携わるようになった。こうして、イギリス公使館の支援もあって一時はイギリス医学が新国家の医療制度の主流になるかに見えた。

佐倉順天堂とボードインに学んだ佐賀藩の相良知安と福井藩の岩佐純は、1969 (明治2) 年に医学取調御用掛に任ぜられ、同時に大病院が改組された「医学校兼病院」で相良は医学校を、岩佐は病院を担当して共に大学権大丞に昇進した。彼らは日本の医学教育と医療制度制定のためにドイツ医学導入の計画を進めた。蘭方医は実際にはドイツ医書を通して学んだものであったこと、また、世界的に見てドイツ医学が優れているという政府顧問フルベッキの意見があったことなどがその理由であった。しかし、佐賀藩や福井藩の出身である彼らに、明治政府で権勢を握る薩摩や長州に対する反撥があったのではないかという見方もある。相良は参議副島種臣や大隈重信を動かし、また折よく大学別当 (文部大臣) に旧福井藩主松平春嶽が就任したこともあって、一挙にドイツ医学の導入が決定された。政府はウィリスの処遇に困っ

て、西郷隆盛が彼の身柄を引き受けて鹿児島に送り、そこで医学校を開設して教師とした。

こうして、ドイツからまず招聘されたのが、ミュルレル (B. C. L. Muller) とホフマン (T. E. Hoffmann) で、明治4年に大学東校に赴任した彼らによって日本の医学制度の大幅な改革が行われた。しかし、ここでは紙数の関係で、日本の近代医学における大恩人であったベルツとスクリバについて紹介するに止めたい。

肌荒れの妙薬ベルツ水で有名なベルツ (Erwin Baelz) は、明治のお雇い外人医師の中で抜きん出て大きい存在であったといわれているが、1875 (明治8) 年に東京大学の内科教師として赴任してから26年間の医学教育と医療活動は目覚ましいものであった。ベルツの日本での医学的功績は、日本人に寄生するフィラリアの発見、肺吸虫卵の発見、恙虫病の研究、脚気、レブラ、などなど、その研究範囲と成果については枚挙に暇がない。医学以外にも、モーコ斑の発見などを含めて日本人の人類学的研究も行っている。また、幅広い研究と学識によって、彼はマイヤー百科事典 (Meyers Konversationslexikon) の第3版補遺で日本の項目を執筆している。

ベルツの社会的活動、公衆衛生面での尽力も忘れることができない。草津で日本固有の温泉治療を見て触発された温泉の科学研究と保養施設 (クア・パーク) の提唱、海水浴と臨海学校の創設、育英資金の開設、狐憑きの研究と治療、学校での検便制度など、今日当たり前のこととして行われているこれらの制度は、ベルツが初めて広めたものであった。また、彼は宮中で医学の講義を行ったことが契機で宮中の侍医となり、皇太子の健康や婚約の相談を受けるほど明治天皇に厚く信任された。

1902 (明治35) 年に第1回日本連合医学会が開かれた。日本医学会総会の始まりである。ベルツは名誉会長として日本医学界の指針について講演し、参列者に感動を与えた。そして同じ年、東京大学の教職を辞し、その後聖路加病院の外科部長や宮廷の侍医を3年ほど務め、1905 (明治38) 年に日本を去る。長年にわたる功績に対して、政府は1900 (明治33) 年に勲一等瑞宝賞を贈ったが、帰国にあたり改めて旭日大綬賞を授与した。

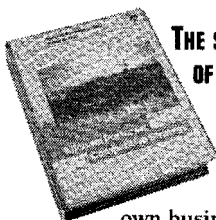
米国ハーバード・ビジネス・スクールの マネジメント・プログラム発売のご案内

長年にわたりBBC(英国放送協会)エンタープライズ社の日本総代理店としてBBC番組のビデオライブラリーを発売してまいりました弊社では、この度ハーバード・ビジネス・スクール・マネジメント・プロダクションズの極東地区(含む日本・韓国・台湾)総代理店の権利を取得いたしました。

それに伴いまして、世界最高の経営大学院の一つである米国ハーバード・ビジネス・スクールのマネジメント・プログラムを発売する運びとなりました。

今回発売させていただくマネジメント・プログラムは全11タイトル、ビデオプログラム39巻、総額460万円です。

マイケル・E・ポーター教授をはじめとするハーバード・ビジネス・スクールの当代一流の教授陣が提供するもので、既に米国では絶大な支持を受けているものです。



THE STARTING POINT FOR ANY SYSTEMATIC CONSIDERATION OF COMPETITIVE STRATEGY.

Michael Porter's work on competitiveness has profoundly influenced all subsequent thinking on this critical subject. This program is designed to enable you and your top management to apply Porter's concepts to your own business. Ultimately, it will help you meet a formidable challenge confronting every business today: plotting a successful strategic course into the twenty-first century.

Harvard Business School Management Programs

● Michael Porter on COMPETITIVE STRATEGY ● C. A. Bartlett & Ghoshal: MANAGING ACROSS BORDERS ● TIME BASED COMPETITION ● Michael Porter: THE COMPETITIVE ADVANTAGE OF NATIONS-GOVERNMENT VERSION/CORPORATE VERSION ● MEASURING CORPORATE PERFORMANCE Series ● J. L. Heskett, W. E. Sasser, Jr. & L. A. Schlesinger: ACHIEVING BREAKTHROUGH SERVICE-THE SENIOR MANAGER PROGRAM/THE FRONTLINE MANAGER PROGRAM ● PEOPLE, SERVICE, SUCCESS Series ● J. I. Cash, Jr. & F. W. McFarlan: COMPETING THROUGH INFORMATION TECHNOLOGY ● D. A. Garvin: COMPETING THROUGH QUALITY ● Rosabeth Moss Kanter on SYNERGIES, ALLIANCES AND NEW VENTURES

(今秋には日本語版発売開始の予定です。)

●お問い合わせは下記へ



AN AUTHORIZED DISTRIBUTOR OF HARVARD BUSINESS
SCHOOL MANAGEMENT PRODUCTIONS IN JAPAN

株式会社 グローバルメディア・システムズ

〒105 東京都港区浜松町2丁目5番5号松井ビル

(映像営業部) TEL.03-3433-4375

FAX.03-3437-1778

1994年7月 通巻第326号 洋書輸入協会

編集者 神田 俊二

〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03) 3271-6901 FAX. (03) 3271-6920

印刷所—藤本総合印刷株式会社